

《楽曲解説》

解説＝池原 舞

10/9 第97回東京オペラシティ定期シリーズ

オペラシティ
10/9

オーチャード
10/18

サントリー
10/30

リムスキー＝コルサコフ(1844-1908)

歌劇『不死身のカッシェイ』(演奏会形式/ロシア語上演/字幕付)

N.A.リムスキー＝コルサコフ(1844-1908)は、19世紀後半から20世紀初頭にかけて活躍したロシアの作曲家である。この時期のロシアでは、自国の文化の価値を見直す動きが芸術界全体で湧き起っていた。こうしたナショナリズムの高まりのなかで、リムスキー＝コルサコフは、伝統ある西洋の語法や作法を規範としつつも、ロシア的な素材を意識的に取り入れていった。

ロシア民話にしばしば登場する悪の王をタイトルロールとしたオペラ『不死身のカッシェイ』(1901-1902)は、彼の晩年に書かれた作品で、上演頻度はいまだに少ないものの、近年再評価が高まりつつある、知られざる傑作だ。『ロシア音楽新聞』の編集者であったE.M.ペトローフスキイ(1873-1919)の筆による台本に基づき、リムスキー＝コルサコフ自身が、娘の助けを借りて改作し、ストーリーを完成させた。

■登場人物とあらすじ

登場人物は、不死身のカッシェイ(テノール)、カッシェイの娘(メゾ・ソプラノ)、イヴァン王子(バリトン)、美しい王女

(ソプラノ)、嵐の勇士(バス)の計5人に加え、見えざる声(舞台裏の合唱)。

ロシア民話では、カッシェイの「死」は、大海原に浮く島に立つ檜の木の根元に隠された箱のなかの兎のなかの鴨のなかの卵にあるとされているが、このオペラでは、カッシェイの娘の涙のなかに隠されているという設定になっている。冷酷な娘は決して涙を流さず、父の死を望む勇者たちを次々と殺してきた。ところが、イヴァン王子と出会い、人を愛する感情を知った娘は、初めて涙を流す。この涙によって、悪の王は死に至るのである。

このドラマティックなラブストーリーを鮮明に描き出すために、リムスキー＝コルサコフは数々の工夫を施したが、特筆すべきなのは「ライトモチーフ」の活用である。

■『ジークフリート』の研究とライトモチーフの活用

「ライトモチーフ」とは、特定の人物や事物と結びつけられた短い楽想のことである。この手法を活用した音楽史上の典型的な事例は、R・ワーグナー

譜例1 第1場冒頭

カッシェイのモチーフ

カッシェイの城のモチーフ

美しい王女のモチーフ

(1813-1883)の楽劇『ニーベルングの指輪』(1848-1874)だろう。全4夜・計15時間という異常な長さにもかかわらず、各々のライトモチーフを拾っていけば、物語の展開を耳で追うことができるのである。母親のお腹のなかにいる子供が未来の英雄ジークフリートであることを示すために「ジークフリートのモチーフ」を用いたシーンなどは、音の特権を活かした最たる例であろう。

興味深いことに、リムスキー＝コルサコフは、『不死身のカッシェイ』を作曲し始めた1901年頃に、『ニーベルングの指輪』の第2夜『ジークフリート』を熱心に研究していたというのだ。実際、『ジークフリート』の第2幕冒頭と『カッシェイ』の第2場冒頭には、似通った音型が存在する。また、『カッシェイ』の第1場で、鏡

に映った人物を、本人たちの登場に先立ってライトモチーフで示す手法も、ワーグナーの模倣といえよう。

以下、主なライトモチーフを中心に音楽的特徴をあげながら、物語を確認していく。

■『不死身のカッシェイ』の音楽的特徴

第1場 カッシェイの城。幕開けから約1分のあいだに、重要なモチーフが3つ提示される(**譜例1**)。冒頭の低弦とファゴットで示される音型が、「カッシェイのモチーフ」(注)である。「半音階」でできたこのモチーフは、カッシェイ本人の登場シーン以外にも、全場を通して何度も現れ、物語全体を覆う魔王の威力と不気味さを仄めかす。対する高音部の、木管楽器による2分音符の下降音型

譜例2 第1場における魔法の鏡のシーン



譜例3 第1場における魔法の鏡のシーン



は、「カッシェイの城のモティーフ」。魔法の象徴としての常套手段である「全音音階」の使用が認められる。続くヴァイオリンの物憂げな旋律が、「美しい王女のモティーフ」である。こうして不吉な城の情景とそこに幽閉された王女の嘆きが音で示されたところで、王女とカッシェイの歌が始まる。

王女はカッシェイに、恋人のイヴァン王子の姿を見せてほしいと哀願する。王女がイヴァン王子を想って夢見心地に過ぎし日の幸福を歌う際に、幕開け以降初めての長調の音楽となる。このような効果的な転調も、オペラの筋書きを音で描写するのに一役買っている。

カッシェイが未来を映す魔法の鏡を取り出すところには、カッシェイの娘とイヴァン王子の姿が映る。ここで、ヴァイオリンによる艶やかな「カッシェイの娘のモティーフ」(譜例2)とチェロのソロによる勇ましい「イヴァン王子のモティーフ」(譜例3)が挿入される。カッシェイは向かってくる彼らを見て慌て、使者を呼びつける。

すると、速い半音階のパッセージによる「嵐のモティーフ」とともに、嵐の勇

士が登場する。嵐の勇士に、カッシェイは、娘が父の死をしっかりと隠しているかを確かめるよう指示し、王女は、自分が待っていることを王子に伝えるよう懇願する。

嵐の勇士が去ってから、カッシェイは王女に、己の不死の秘密を語り出す。西洋音楽において古くから忌み嫌われてきた「悪魔の音程」が多用されたこのアリオーソは、己の無敵を誇示した歌詞とは裏腹に、孤独感が漂う。

独白のあとカッシェイは、王女に子守歌を歌うよう命令するが、彼女は応じない。怒ったカッシェイは、グースリ琴に歌を歌わせ、雪嵐を起こす魔法をかける。ハーブのグリッサンドとともに、合唱が「白髪のカッシェイに死は訪れぬ」と歌う。

第2場 カッシェイの娘の領地。チェレスタとハーブを伴った木管楽器の跳ねるような音型は、「カッシェイの娘の屋敷のモティーフ」である。この音型は、「カッシェイの城のモティーフ」との親和性が高く、親子の結びつきを表わしている。また、「カッシェイの娘のモティーフ」に交じって「カッシェイのモティーフ」と

その変形も散りばめられており、娘の領地にまで父の魔力が及んでいることを暗示させる。

第2場は、カッシェイの娘が秘薬を用意しているシーンから始まる。聴きどころは、彼女の歌う宝剣の歌。シンバルを伴った堂々たる行進曲調の音楽である。

そこへ魔法の力でおびき寄せられたイヴァン王子が登場。カッシェイの娘は王子を騙し、黄金の杯に入った忘却の秘薬を飲ませる。秘薬の力でカッシェイの娘にすっかり心を奪われるイヴァン王子。2人は情熱的な二重唱を歌う。

王子が眠ったあと、カッシェイの娘は彼を殺そうとするが、あまりの美しさに躊躇う。そこへ嵐の勇士が到着。冷たい風を受けて正気に戻った王子に、嵐の勇士は、王女の言葉を伝える。しかし肝心なカッシェイの命令を遂行できぬうちに、言われるがまま王子を空飛ぶ絨毯に乗せ、カッシェイの城に向けて出発してしまう。カッシェイの娘は、突然王子がさらわれて悲しくなり、あとを追う。

第3場 再び、カッシェイの城。王女の子守歌でカッシェイは眠っている。そこへ嵐の勇士がイヴァン王子を連れて到着。王女は王子との再会を喜ぶ。心躍る

ような軽快なリズムに変形した「美しい王女のモチーフ」に導かれ、2人は感動の二重唱を歌う。

すぐに追ってきたカッシェイの娘は、王子に愛を告白するも、拒絶される。目覚めたカッシェイが、娘にしっかりと死を隠しているか尋ねるが、彼女はそれどころではない。ここで、4人の混沌とした四重唱が挟まれ、いよいよクライマックスへ。

悲しみにくれるカッシェイの娘に、同情した王女がキスをする、印象深い転調とともに、ハーブの優しい音色で、遂に、娘が生まれて初めて流す涙が描かれる。人を愛する心が、魔力に勝ったのだ。娘の涙によって、カッシェイは苦しみながら滅びていく。

心が浄化された娘は、柳に姿を変える。嵐の勇士が王国の扉を開き、王子と王女を解放すると、合唱が自由を讃える。

注：本稿におけるモチーフ抽出と命名は、池原による分析と解釈である。

[楽器編成] フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2(2番はイングリッシュ・ホルン持ち替え)、クラリネット2(2番はバス・クラリネット持ち替え)、ファゴット2(2番はコントラファゴット持ち替え)、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、タムタム、ハーブ、チェレスタ、弦楽5部

いけはら・まい(音楽学)／2013年3月に博士号(音楽学)を取得。現在、早稲田大学グローバルエデュケーションセンター助教、国立音楽大学音楽研究所「20世紀前半アメリカ音楽研究部門」客員所員。専門は、ストラヴィンスキーの自筆譜研究。